一年目のある日。

そこには無数の木柱の群れの中を縫うように彼方此方で些細な日常の風景が重なって見えている。

二六年目のとある日。

人々の使い込みや風雨によって徐々に付きはじめた汚れや傷。微かに日常の風景が霞んできたようだ。

一〇〇年目のある日。

人の顔に皺が出来るように、いくつもの傷や汚れが重なって深みのある表情へと成長した。今では部屋同士は眼を凝らせば見える程度となり、独立した落ち着きのある場をもつようになった。

表情を纏う

硝子にとって透過することは当然のことであり、透過性が乏しくなっていく汚れや傷は妬まれる存在になりがちです。

しかし、嫌われ者になりがちな彼らは、微かに色付いていたり模様を創りだしたりと半永久的な寿命を持つ硝子という存在に「しなやかさであり強さ」を主張する存在なのかもしれません。

そんな一面を持つ硝子を木のフレームで挟み込んだ壁を円形に並べたシェアハウスを提案します。

人が成長し、表情豊かになっていくようにこの建築もまた時と共に成長をしていきます。

自然的な要因により徐々に個と公の境界線は立ち現れ、つながっているけれど見えにくい場であったり、つながっていないけれど見える場であったりと硝子のもつ透明性が空間自体を歪ませます。

そこに生まれる風景はすべて、ここに住まう一人一人の表情であり、人生の軌跡です。

この建築は傷つき汚れていく事で表情を纏い、より人間らしく豊かに成長していく「しなやかで強い社会の建築」となるでしょう。

● 表情を纏うしなやかさ / 溶ー解像度

硝子のもつ透明性という解像度は時と共に溶けていく。

● 平面図

様々な大きさ・距離の部屋たちの関係性は時と共に変化していく。

● 内観